

新妻の北上さまだよ。

宇古木蒼  
イラスト…七竈

「そういえばさ大井っち。あたし今度、ここ出ていくから」

夕食後から消灯までの時間をどう過ごすかはそれぞれの艦娘の自由に任されている。食事後もそのまま食堂で友人や姉妹とお喋りをするもの、営庭で自主トレーニングに励むもの、自宅でくつろぐもの、酒保で買い物を楽しむもの。

自由時間とはいえ各艦隊の旗艦を務める艦娘は戦闘詳報の作成に大忙しだし、輸送任務や護衛任務に出て行く駆逐艦たちもいる。

まさに十人十色、それぞればらばらに時間を過ごす艦娘達の中で、鎮守府でただ二人だけの——木曾はまだ練度が低い——重雷装巡洋艦として相部屋を与えられている大井と北上の二人は、自室でくつろぐのを常にしていた。

気心の知れた親友同士、二人の部屋に沈黙が続いても特に気にはならない。だからこそ、唐突に発せられた北上の言葉に大井は狼狽する。

「ここを出ていくって、どういうことですか？ 艦娘はみんな、寮に入る決まりじゃないですか」

「ええと、それは、ほら」

口ごもりながら北上は左手を撫でる。その薬指には、小さく銀の指輪が光っている。

機能一点張り、魚雷の追加にともない軽量化として布地が減

らされたお洒落と無縁の改二の艦娘制服と不釣り合いにきらめくその指輪こそ、提督と艦娘を繋ぐ絆——ケツコンカッコカリ——の証明だった。

非常に高い練度の艦娘に与えられる艤装との精神的適合度を高めるための装備。指輪状のそれをやりとりする行為は、いつの頃からか人間の男女の結婚になぞらえて「ケツコンカッコカリ」と呼ばれるようになっていた。

艦娘達は人間の兵士よろしく艦種ごとに棟に分かれて鎮守府の営内で生活している。最新の装備を身につけ、また深海棲艦と直接接触するという観点からも一般人との接触は出来るだけ避けるようにとの方策がとられた結果がこの営内居住方式だった。

「ケツコンすると、外に住んでも良くなるんだって」

「そんな話、私は聞いたことないんですけど」

外に住む、つまりはこの寮を出ていくということ。艦娘の営外居住なんて聞いたこともないし、実例もない……が、なにぶんケツコンするのというのは艦娘にとつて特別な出来事で、この鎮守府では北上が始めてだ。

もしかしたらそんな特例が本当にあるのかもしれない、と大井は思い直す。

「せっかくなケツコンしたのにさ、全然一緒に居られなくて……だから、提督と一緒に住むことにしたんだ」

左手薬指にはまる指輪に目をやり、北上はため息を漏らす。

一人で鎮守府の全艦娘に対しての責任を持つ提督の仕事は多い。秘書艦や妖精達の助けを借りては居るとは言え毎日夜遅くまで執務室に灯りが点っていることが常だ。

「秘書艦になればいいんですよ。秘書艦なら、いつでも一緒に居られますよ」

「そりゃそうだけど、あたし達は秘書艦向きじゃないでしょ」

大井が机の上で分解整備していた甲標的と九三式魚雷に北上がちらりと視線をやる。

甲標的と魚雷による遠距離からの強力な攻撃能力を持つ重雷装巡洋艦だが、その代償として主砲での砲撃には長けていないし航空攻撃にも弱い。加えて、そもそも艦としてのベースが軽巡洋艦なので敵の攻撃を被弾してしまった際の打たれ弱さはどうしようも無いし、索敵能力や通信能力も戦艦や重巡と比べると一段劣る。水上偵察機だって載せられない。

魚雷を下ろし、電探と砲を装備した夜戦仕様にすれば夜戦での活躍も期待できたが、それも水雷戦隊の一員としてではなく単艦で暴れる形になる。

秘書艦は慣例として主力艦隊の旗艦を兼ねることになっている。もちろん常時それを行っては事務仕事がちゆかないから秘書艦でも出撃しないことはままあるにはあるにせよ、秘書艦には戦闘能力だけでなく指揮能力も求められる。

「まあ、あたしたちは重雷装巡洋艦だからねえ」

北上のその一言に、彼女たち二人を取り巻く事情の全てが集

約されていた。魚雷を扱う艦種の最高峰にして、遠距離飽和雷撃と夜戦能力に特化したひどくいびつな艦娘。大井は、そしてきつと北上も、そのあり方に誇りを抱いてはいたが、必ずしも良いことばかりでないのは重々承知していた。

「それで、いつから提督の家で暮らすようになるんですか？」

「んー、まだ許可を申請中だから日にちは決まってるんじゃないかな。準備が出来たら呼んでくれるって」

何もかも小綺麗に整えられた大井の机とは正反対に、部屋の反対側の北上のベッドと机の周辺は何だか雑然としている。

たまに片付けてやってもすぐに元通りに戻ってしまうものぐさな親友が、提督と共同生活。

「これは、準備が必要ですね……」

「あれ、大井っち、なんか顔が怖いよ」

ケツコンが人間の男女の結婚のようなものだと思えば、ケツコンした艦娘と男性の提督が二人で暮らす生活もすなわち新婚生活と言うことになる。

目の前で不思議そうにしている親友は、それがどれくらい重要なことか判っているんだろうか。

「北上さん、そうと決まれば準備ですよ、準備。買い物に行きましよう」

「買い物？ あたし、いま別に欲しいもの無いけど」

「そうじゃなくて、新婚生活の準備です。提督と一緒に暮らすのに、今のままでいいと思ってるんですか？」